



大本山永平寺



塵を払い垢を除く

六月十五日、永平寺では「羅漢講式」が行われます。羅漢とは、諸々の煩惱が尽き、再び欲望に囚われることない覺りを体得した聖者のことです。

お釈迦さまは、優れた十六人の弟子に「わたし亡き後、永く現世にとどまり仏法を守護し、衆生を導くように」と言われたそうです。この十六人を十六羅漢といい、声明という独特の節まわしでその御徳を讃え、ご供養申し上げる法要を行うのです。

十六羅漢の一人に、住茶半諾迦（チューダ・パンタカ）尊者がおられ、またの名を周利槃特ともいいます。槃特は、他の者たちにあいそを尽かされるほど物覚えが悪く愚鈍であった為、自分を責め嘆き悲しんでおりました。その姿を見たお釈迦さまは「自分を愚鈍だと知る者は愚かではない。自分を賢いと思っている者ほど自分をよくわかっていないのです」と、お慰めになり「塵を払い、垢を除かん」とお唱えして掃除を行いなさい」と示され、箒を授けられました。お釈迦さまのお示しを忘れないよう、毎日お唱えしながら掃除を続けた槃特はやがて、掃いても掃いても出てくる塵や垢は、自分の心も同じであるということに気づかれたのです。そして、仏の御教えを理解し、自らの欲望という塵と執着という垢を払い除き、阿羅漢と成られたのです。

永平寺の修行僧たちも日々、「塵を払い、垢を除かん」と修行に励み、阿羅漢への道を歩んでおります。

ご本山だより



大本山總持寺

江川禪師と池辺晋一郎氏



二祖峨山韶碩禪師大遠忌の準法要

いよいよ六月一日から大遠忌の「準法要」が始まります。

準法要は八日まで続き、連日各地より大勢の焼香師さまや報恩の参拝団がお越しになります。またお手伝いのご寺院さまも上山され、本山は厳肅ながらも賑やかな雰囲気にも包まれております。

この他、今月は「大遠忌記念の大きな行持が幾つも行われます。まず十三日には鶴見大学会館で「峨山禪師シンポジウム」が開催され、峨山禪師の功績とその思想や曹洞宗教団発展の背景等に関して多角的に考察いたします。

また、十八日には裏千家の千宗室御家元ご出仕のもと、ご両尊へ「献茶式」(大祖堂)および「大茶会」(紫雲臺)が行われます。更に、二十三日には「祈りの調べ・池辺晋一郎と僧伽の出会い」と題して横浜みなとみらいホールで読経とオーケストラ演奏による音楽法要が行われます。日本を代表する作曲家・池辺晋一郎氏に大遠忌記念の新曲を依頼し、その初演を氏ご自身の指揮でお話を交えながら演奏していただきます。

このように、修行僧にとって一生の思い出となる多くの大遠忌記念行持に接することになりますが「修行」という本分もおろそかには出来ません。六月は中旬に「伝光会撰心」が行われ、池田魯参老師ご提唱による『伝光録』を参究し、坐禅に徹します。

大本山總持寺 / 045-581-6021

曹洞俳壇

選・村松五灰子

海に出て長蛇のごとし雪濁り

岩手県 関合 新一

評 鳥が見る俯瞰ふかんのような大きな景。大河から吐き出す雪濁りの様を「長蛇」とし大自然のなせる力として十七字に描いた。

這ひ這ひの手が伸ぶあはや雛あられ

東京都 伊奈 三郎

評 彩りも綺麗なそれを幼い眼は発見した。這ひ這ひは案外早い。「あわや」が見事に集約し十七字に映像を描き出した。

◆この土手で今年も母とつくし摘む 福岡県 井本匡早子

◆万屋に客二三人春火鉢 宮城県 須藤智恵子

◆ひと雨の色のつけたる木の芽かな 埼玉県 黒田 邦枝

◆また一戸空家となるや山眠る 長野県 下島 博

◆経行や廊下に写る梅白く 静岡県 富岡 一郎

◆一行に卒寿と記す初日記 三重県 山下 利夫

◆春風や七年が過ぎ只管打坐しかんたざ 福岡県 安部 正和

◆寒明けや夕べに聴けるニニロツソ 千葉県 鈴木 英子

◆田を歩く雉むね写さんと構へしが 岐阜県 市川 芳子

◆春一番予定日近き孫が来る 新潟県 大橋 恒次

*選者吟

闇と言ふ神の領域螢の火

五灰子

*作句小見

なかなか俳句がまとまらない、今ひとつ味わいが無い。そんなあるとき、ふと得られる「目から鱗」のような、小さな小さな開眼。季題を通して生まれる気がします。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

春の湖比良嶺白し空青し眺め暮して今日も
飽きざり

滋賀県 三田 和子

評 比良嶺は琵琶湖西岸の山を指すのでこの湖は琵琶湖のこと。作者は東岸から湖を望みつつ対岸の嶺の残雪と青空を眺める。春の景が詠われるがどの季節にも夫々の趣があるのだらう。それを誇りとし慈しみ暮らす人の日常が垣間見える。

ゆつくりと雪掻きするも技のうち鍛えし老
いに力まだあり

福島県 西木 甚

評 重労働と聞く雪掻きの作業を、無駄な力を使うことなく、長年の知恵とコツをもって乗り切ろうとする気迫が伝わってくる。九十歳の作者の余裕ある雪掻きの様子、素晴らしい。

◆本堂のライトを落すコンサートボリューム上げよ生者のために
◆小庭辺にすこし組みたる椎茸の樽木に寒茸ふきあがりい

岐阜県 杉山 洋子
三重県 野呂 と志

◆亡き夫の邦楽の趣味解せぬまま月日流れて早や十三回忌

愛知県 田中 澤子

◆束縛のネットの切れ端つけたまま鴨はばたきぬ産毛ちらして

山口県 横川美代子

◆鉄塔にのぼりて電線を引く人の声響くなり雪の深山に

福島県 大槻 弘

◆おい百足自分の足を踏んづけて蹴躓くことないのかお前

島根県 横山 藁吾

◆わが短歌を万華鏡のなかに封じこめ覗いてみたし日々の情念

岡山県 尾原スエコ

◆静かなる独り住まいにジョウビタキ想いを綴りコトコト語る

三重県 伊藤 正義

◆菜の花の黄の鮮やかに見ゆる丘その先海の蒼がくつきり

新潟県 大橋 恒次

◆団結の二字も擦れる腕章に若かりし日のオルグ思ほゆ

新潟県 長浜 武士

*選者詠

里山の切通しにて耳すます幹上りゆく春の水音
ちづ

*作歌小見

春になり小さな生き物たちが活発に動き始めるようになりました。横川さんの生命力に溢れる鴨の描写、横山さんの百足との対話、ジョウビタキの鳴き声に想いを寄せる伊藤さんの歌など投稿歌からも季節の移りを感じます。